

グローバル・コンテクストのなかの明治憲法

瀧井一博

1 問題の所在

明治憲法には多くの虚飾が付きまとっている。曰く、天皇絶対主義を定めた憲法である。曰く、ドイツ流の似非立憲主義の憲法である。曰く、自由民権運動のような国民全体の意向を無視した憲法である。

しかし、現実の憲法の制定過程や発布時の様子をみた時、また、当時の憲法や立憲主義に関するグローバルな議論の状況を考え合せた時、上のような捉え方は必ずしも的を射ていないように思われる。

本報告では、明治憲法の制定者たちの考えていたことを掘り起こし、彼らが憲法を通じて何をもたらそうとしていたのかを再検討し、出来上がった憲法が国の内外でどのように受け止められたのかを考察する。そうすることで、明治憲法が、当時の国際的なコンテクストに照らしてみても、「進歩的」な憲法だったことを提示したい。そのうえで、そのように「進歩的」だった憲法に欠けていたものは何だったのかを考えてみたい。

2 保守反動的な明治憲法

戦後、歴史学を牽引してきた家永三郎氏は、明治憲法について次のように概括している。

この憲法は〔中略〕僅少の専制官僚とドイツ人との合作に成る、国民大衆の意志を全く無視して制定された憲法というだけではなく、その内容は、さきに明治十年代の国民の最大公約数的憲法構想といちじるしくかけはなれた、当時においては少数例外の君権主義の線をさらに極端にまで推し進めた非民主的な憲法であったのである。¹

明治憲法の負の側面が簡約されている。あえてこちらで説明するまでもない。このようなものとして、明治憲法は非民主的、軍国主義的、保守反動的なものと評価されてきた。これは、戦後、明治憲法の改正によって成立した日本国憲法を高く持ち上げ

1 家永三郎ほか編『新編 明治前期の憲法構想』福村出版、2005年、4頁。

る姿勢と表裏をなしている。悪法である明治憲法を否定して出来上がった日本国憲法は、民主的、平和主義的、進歩的な憲法だという評価であり、その裏返しとして明治憲法は戦後の言論空間のなかで語られてきたといえる。

しかし、歴史や現実の実相をきちんと認識しようとする立場に立った時、そのような語り口は妨げとなる。前述のような戦後思想の空気のなかで、にもかかわらず明治憲法研究を推し進めた憲法学者の小嶋和司氏は、新憲法が公布された頃、「明治憲法の欠陥・不当を述べて、新憲法はこうなったと讃える」論調が支配していたことを指摘し、「明治憲法の欠陥・不当は、過去半世紀間に蓄積された運営法令や事実からも採集されるが、新憲法として語られるのは未施行の憲法典の規定だけ。一方は事実であり、他方は理想主義的な規範」にしかすぎず、後者にはまだ比較すべき素材はないことを論じている。その後も、「新憲法を讃えるために旧憲法を不当におとしめる風潮」ははびこり、その余波は現在にまで及んでいると小嶋氏は述べている²。傾聴すべき批判であろう。理念で現実を処断するのは簡単である。しかし、それは社会科学的な姿勢とはいえない。日本国憲法のもとで、どのような統治上の事実が積み重ねられてきたのか。事実と事実の比較でなければ意味をなさない。

本報告は、日本の新旧両憲法下での憲法的現実を比較照合するものではないが、明治憲法下でのいくつかの重大な事実を引きながら、日本憲法史の特質を考えてみたい。

3 歓呼の声のなかの憲法発布

明治22（1889）年2月11日の大日本帝国憲法発布の日の国民の狂騒については、すでに様々なことが言われている。著名なものとして、お雇い外国人の医師エルヴィン・ベルツのものが挙げられよう。ベルツは、賜与された憲法の内容も知らずに祝賀する日本国民の滑稽さを日記に記している³。

ここでは、そのような喧騒のなかにいた当事者の声をひとつ拾っておこう。明治生まれのある市井の職人が、戦後、当時を回想して次のように語っている。

なにしろあたしは憲法発ポをこの目で見てんですからねえ。ありゃアまアえらい騒ぎでした。さアーあたしのたしか九ツ位の時だと思うけど、いたる所の商店で四斗樽の鏡を抜いてまるでお祭り。酔っぱらいは出放題で、それが日本国中ってんだから。そのあとの凱旋祝いもたいしたもんだったけどとても追っ付くもんじゃなかったね。⁴

2 小嶋和司『憲法学講和』有斐閣、1982年、246頁。

3 トク・ベルツ編『ベルツの日記』上、菅沼竜太郎訳、岩波文庫、1979年、134頁。

4 「地蔵の富さん聞き書抄」、斎藤隆介『職人衆昔ばなし』文藝春秋、1967年、36頁。

他方で、この日の国民的祝祭については、その作為性を指摘することもできる。ベルツと同様、帝国大学教授のお雇いドイツ人だったカール・ラートゲンは、当初市民は憲法発布に全く無関心、否それどころかこの日は祝日となるので休業しなければならないとお達しが下って、かえって市中の人々は迷惑気味だったことを書簡で報じている⁵。

永井荷風も小説「花火」のなかで、この祝祭の欺瞞性を指摘している。荷風は発布式の日の思い出を次のように素っ気なく記している。

明治二十三年の二月に憲法発布の祝賀祭があつた。おそらく此れがわたしの記憶する社会的祭日の最初のものであらう。数へて見ると十二歳の春。小石川の家にゐた時である。寒いので何処へも外へは出なかつたが然し提灯行列といふもの、始まりは此の祭日からであることをわたしは知つてゐる。又国民が国家に対して「万歳」と呼ぶ言葉を覚えたのも確か此の時から始つたやうに記憶してゐる。⁶

少年荷風は、帝国大学に勤めていた父から、この日父が学生たちを連れて、二重橋へ繰り出し、万歳を三呼したと聞かされたうで、「学者や書生が行列して何かするのは西洋にはよくある事だと遠い国の話をされた」のを聞き、「何となく可笑しいやうな気」がしたと書いている。鋭敏な文明批評家荷風は、この祝典が「西洋から模倣して新に作り出した現象の一」であり、江戸時代から民衆が伝承してきた氏神の祭礼などとは外形も精神も異にしたものであることを嗅ぎ取っていたのである。新しい形式の祭にしばしば潜んでいる「政治的策略」を、である。

民衆の身体を祝祭空間のなかに動員して均一化することによる国民化の“策略”については、民衆史家の牧原憲夫氏の綿密な考証がある⁷。本稿ではその点には立ち入らず、この祝典がもっていたもうひとつの“策略”に目を向けてみたい。筆者の考えるところ、憲法発布式の目指したものは、何も国民感化だけだったのではない。そこには外へ向けての効果も計算されていた。すなわち、発布式は、西洋列強に対する新築なった明治国家の竣工の式でもあったのである。

そのことを十二分に意識して行動したのが、他ならぬ明治天皇だった。天皇は発布式に先立つ紀元節御親祭こそ日本古来の「古代服」を身にまとい、皇祖皇宗に対して憲法発布の御告文を奏するという復古的儀礼を守ったものの、それが終わるや洋式の軍服に着替えて皇居正殿へと移動し、発布式に臨んだ。御親祭とは対照的に、それは徹底して洋風を意識して構成された。

5 拙著『文明史のなかの明治憲法』講談社選書メチエ、2003年、150頁以下。

6 永井荷風『花火・雨瀟瀟 他二篇』岩波文庫、1956年、8頁。引用に際して、旧字体は新字体に改めた。以下同。

7 ここでは特に『客分と国民のあいだ』吉川弘文館、1998年、159頁以下を挙げておく。

重要なことは、そのような場に在日の各国外交官やお雇い外国人が大挙して招待されていたことである。彼らは、言わば新生日本の誕生を見届ける立会人としての役割を期待されていたのだと考えられる。そのために、日本側としては、西洋各国の代表に漏れなく参列してもらうことを要請していた。例えば、オーストリア・ハンガリー帝国の公使館は発布式直前の1月30日に愛人と心中事件を起こして死去した同国皇太子の喪中であることを慮って、式に出ることを躊躇していた。しかし、大隈重信外相より出席を懇請する天皇の言葉を伝えられ、参列を決めた⁸。

すべての条約締結国代表団の列席。それは、天皇の強く所望するところだったという。その胸の内は、アメリカ公使ハバードが伝える次のようなエピソードにうかがえる。

当日の晩餐の席で天皇に直接本国からの祝意を伝えたハバードは、それへの謝意を告げられた後、「朕の臣民に自由主義的な意味で政治的宗教的自由を保障したこの憲法の発布を機に、貴国の政府と国民がわが国のために長きにわたって温めてこられた共感と友情のさらなる増進がもたらされることを願っている」との言葉をかけられたという⁹。先のオーストリア公使への対応とあわせ考えれば、憲法発布式がいかに外交的にシンボリックな意味合いを帯びていたかが了解されるだろう。それは、自由主義を掲げる文明国への参入のための政治的祝祭だったのである。

そのような願いを込めて発布された憲法であるから、それは西洋諸国によって認知されることを必要とした。駐日外交団は概ね好意的な評価を本国に向けて発している。最も熱烈な賛辞を送ったのは、前述のハバード・アメリカ公使である。

私が——一八八五年〔の着任〕以来この宮廷で、そしてこの国民に囲まれて私的かつ公的に——観察し経験したところ、非常に多く記され語られてきたこの国の進歩のすべて、すなわちこの憲法が最高度にそして最も格調高く証している賢明で自由な政府への進歩は、短命ないしかりそめのものではなく、薄っぺらな西洋文明の化粧飾りであって本体は相変わらず猛々しい東洋的政治システムに乗っかっているものでもないことを確信させます。むしろ、それはこの国の歴史的過去に対する揺るぎない永続的な勝利の証であり、これによって日本は諸国家とともに新しい時代へと導かれるのです。

日本で要路にあった者が読んだならば、もって瞑すべしの感慨をもったことだろう。

当時の民権派の新聞・雑誌も総じて、憲法の発布を歓迎している。「余は大日本帝国憲法を良憲法と思ふなり、聞しに優る良憲法と思ふなり」とは、改進黨の論客高田早苗の評である。これは改進黨の共通見解といってよいもので、毎日新聞の記者をし

8 1889年2月11日付外相宛通信（Haus- Hof- u. Staatsarchiv 所蔵）。

9 1889年2月14日付国務長官宛通信（Despatches from Unites States ministers to Japan, Vol.59, the National Archives at College Park, Maryland 所蔵）。

ていた肥塚龍も新聞紙上で「大体に於いては実に称賛すべきの憲法なり」と記していたほか、ある党員は憲法を一覧して「満腔の歡喜の情を催した」と述べながら、「私共ばかりぢやない、全国の国民中一人として不満を称へるやうなものはなかつたやうに思ひます」との談話を残している¹⁰。

改進黨の人々の好意的な評価の背景には、前年2月における大隈重信の入閣という事態があったであろう。だがそれにとどまらず、彼らの示す歓迎には、もっと実質的な感激も込められていた。例えば、後に衆議院議長を務めることになる大岡育造（当時東京府会議員）は、憲法発布時を振り返って次のように回顧している。

憲法発布の当日。一県会議員に至る迄宮中の御式に参列さしたと云ふ事を聞いた時。どんなに私は驚いたらう。今迄身分ある相当の人々でさへも。宮中に入る事が出来ずに遙かに皇居を伏拝んで御門の砂を押戴いて来たと云ふ話を屢聴いた。然るに其当日一平民たる県会議員迄が宮中に参内する光栄を得た、何と云ふ著しい変化であらう。¹¹

実際に式に参列することのできたのは府県会議長までであったが、広く県会議員までが参列を許されたとの風聞が巷間に広がり、民心を捉えていたということは重要である。この日宮中は政治に携わる者に広く公開され、政府と敵対していた者でさえ議員であれば招き入れられたと観念されたのである。新装の宮中正殿は、憲法の下賜を通じて、これまでの政治的対立を宥和する場としてお披露目を遂げたといえよう。憲法発布と同時に、政治犯として獄にあった民権派の壮士たちが挙って大赦を得て釈放されているが、それも憲法が宮中から発する政治的宥和のメッセージと見なすことができる。

このように憲法の制定によって民権派は、自分たちの存在が体制によって認知され、国政にあずかる道が切り開かれたという実感を抱いた。その意味で、彼らも憲法を政治的なシンボルとして受容することに吝かではなかったのである。植木枝盛の筆になると伝えられるある新聞記事が、「噫憲法よ汝已に生れたり、吾之を祝す、已に汝の生れたるを祝すれば随つて又汝の成長するを祈らざるべからず、汝ねがわ尚くば健食せよ」¹²と記すように、憲法ができ議会は開設される、とにもかくにも闘いの舞台は揃った、というのが彼らの偽らざる感慨だったであろう。

以上のように、宮中での憲法発布式ならびにそこから発信されたイメージは、疑いもなく政治の新しいあり方を告げるものだった。政治を目的として築かれる私人たちのネットワークや結社、そしてそれらを通じて人々が構築し、あるいは動員されてい

10 加藤政之助談、尾佐竹猛『日本憲法史大綱』下巻、宗高書房、1939年、797頁。

11 尾佐竹、前掲『日本憲法史大綱』796頁。

12 稲田正次『明治憲法成立史』下巻、有斐閣、1962年、921頁。

く政治の空間を、ドイツの哲学者ユルゲン・ハーバーマスにならって「公共圏 (Öffentlichkeit)」と呼ぶならば、明治憲法の発布はまさに国民国家としての公共圏が明治日本にもたらされたことを告げる一大イベントだったのである。もっともそれはハーバーマスがいうような下からの市民的公共圏というよりも、宮中を発信源とする欽定的公共圏と呼ばれるものなのであろうが。

4 憲法制定者の意図

憲法の作成者たちはどのような思いで、憲法を制定したのだろうか。ここでは、それを考えるよすがとして、憲法起草にリーダーシップをとった伊藤博文が憲法発布後に行った演説を検討したい。それは、国立国会図書館憲政資料室所蔵『伊東巳代治関係文書』に収められている1889年2月27日付の「各親王殿下及貴族ニ対シ」と題された演説である(書類の部104)。読んで字の如く親王や貴族を集めてなされたこの講演は、伊藤が皇族やかつての主君層を中心とした華族に対して、腹藏なく憲法政治のあるべき姿を開陳しているものとして注目に値する。その内容は、同じ時期に彼が新聞紙上で公にしてきた演説のように、議会や裁判所による掣肘から超然とした自由な行政活動を弁証するものとは趣を異にしている。逆にそこで展開されているのは、国民主体の民主政治の弁なのである。従来、取り上げられることのなかった史料なので、以下、その内容を詳しくたどってみよう¹³。

まず伊藤は、日本の国体の特質を称揚することから始める。

日本に於ては、今日まで歴史の伝えることに於て開闢以来主権者は万世一系の皇統によって統治されて居り、人種も亦斯の如く続いて居ります。尤も中古の歴史などを繙いてみますと、或は朝鮮の人種なども這入った様なことも有りますけれども、先ず大数の部分に於ては開闢以来の人種のひろがりと言わなければなりませぬ。

日本国は開闢^{かいびやく}以来、大体において単一民族によって構成され、万世一系の皇統がこれを統治してきたという皇国史観である。そしてこのような国家は世界のなかでも比類がないと説かれる。その他の国々のなかで王家の交代や民族的な変容を経ていない国はないからである。

このような典型的な国体論を伊藤も掲げるが、注目すべきなのは、これに続けて彼が次のように述べて、この日本の国体(彼は「国柄」という言葉を用いる)を同時代史的な視座のうえで相対化していることである。

13 以下、引用は、瀧井編『伊藤博文演説集』2011年、講談社学術文庫、41-51頁による。

今日の如く外国と交通の無い時分の、日本の学者が只日本独り貴くして、外は野蛮の様に言って居りましたものも段々ありまするが、其の外が野蛮であって我が国のみ開けて居ると云うことを以て貴しとするよりは、自国は生れて来た以来今日に存続したものが一つのものであると云うことの方が世界に誇るに足るものと考えます。

ここに表れているのは、万世一系という国体を掲げつつも、その卓越性に閉じこめるのではなく、むしろ国際社会との関係性を意識したうえでその特質を捉え直そうとの姿勢である。伊藤は幕末期の神国論的な攘夷思想やこの時期まだ一定の力を有していた儒教的保守主義とは一線を画し、諸外国と開かれた関係を構築していける近代的独立国家の像を前提としている。伊藤の国体論とは、そのような国際社会のなかでの主体的かつ協調的なアクターたりうる独立国家を弁証するための方便だったのではないかとすら考えられるが、次の伊藤の発言を味読すれば、そういった発想も是認され得るだろう。

日本は箇様に世界に比類なき国柄であります。此の世界に比類なき国柄の国が今日世界万国と交通を開くと云うことになって参りまして、其交通上から関係を及ぼして来ると云うことは種々様々のことが有りますが、併し何れにしましても、此の関係より皆我れに取って利することが無ければなりませぬ。己れを保護し、己れを進めて行くと云うことと見なければなりませぬ。

いずれにせよ、伊藤は国際社会と広く関係を結び、それを通じて国の利益を高めていくことを標榜している。そのようにして海外との全面的な交通を行えば、やがては日本の国体の変容が生じるのではないかと懸念が聞かれるが、それに対しては次のように述べて反駁している。

仮令い変ずるにしても、変ずる事柄は定って居ることで、皆我れを保護し我れを進めて他に侵されず、外と競争をして、以て己れの独立の位置を保って行くと云う便宜上だけで有りますから、我れの「からだ」を変ずると云うことでは有りませぬ。其の改良よりして又内部の改良進歩も必要を感じて来たすものと考えなければなりませぬ。

ここには、伊藤の進化論的発想が読み込める。つまり、伊藤の立場とは、国家の「体」は外界との接触によって全く別のものに変身するというのではなく、むしろそれとの相互作用を通じて自生的に改良されていくのであり、またそうあるべきだとの漸進的な進化論のそれだと見なすことができよう。さらに付言すれば、伊藤は身体という外面以上にその内部の変容を問題としている。その内部とは何か。伊藤がここで

強調しているのが、国民の精神状態である。国民をより一層文明的に導いていくこと、それが国家の進化を決定づける重要なファクターとされる。曰く、

他国と競争して、以て独立の地位を保ち、国威を損せぬ様にしなければならぬと云うには、人民の学力を進め、人民の智識を進めなければなりません。其結果は一国の力の上に於て大いなる国力の発達を顕すと云うことは、自然の結果で有ります。

広く諸外国に国を開くことになった今、日本の国際競争力を決するのは国民の民度だという。「人民を暗愚にして置いては国力を増進することに於て妨げが有るゆえに、人民の智徳並び進ましめて、学問の土台を上げて国力を増進する基としなければならぬ」ないのである。従前の論旨と繋げれば、国民の知力の向上を図れば、国家は自生的に進化の方向を辿っていけるということであろう。

では、伊藤は進化の方向にどのような政治体制を構想しているのか。この点に関する彼の言明を聞いてみよう。

人民の学力、智識を進歩さして、文化に誘導さして参りますと、人民も己れの国家何物である、己れの政治何物である、他国の政治何物である、他国の国力何物である、他国の兵力何物であると言うことを、学問をする結果に就て知って来るので、其れが知って来る様になれば知って来るに就て、支配をしなければなりません。若し其の支配の仕方が善く無いと云うと、其の人民は是非善悪の見分けを付けることの出来る人民で有るから、黙って居れと言って一国は治まるもので無い。

支配者にとって人民の開化とは両刃の剣である。開かれた知は国力の増強をもたらすのみならず、現実の統治を批判する精神をももたらすからである。しかし伊藤は、あくまでそのような人民を礎とする政治のあり方を唱える。なぜならば、人民の開化は文明諸国にとって「普通の道理」だからである。

では、開かれた知性を有し批判精神をも兼ね備えた国民を前にして、支配の方法はどのように変わるべきなのか。伊藤はそれを「曖昧模糊の間に物を置くことが出来ませぬ」と前置きして、次のように述べる。

君主は則ち君主の位置に在って、君主の権を有って一国を統治しなければならぬ。臣民は臣民の尽すべき義務が明かにならなければならぬ。是れが憲法政治上に於て必要なることで有ります。

このように治者と被治者の権限と義務を画定することが必要とされる。それを実現するのが憲法に他ならない。さらに語を継いで次のように説かれる。

支配す可きものは君主、即ち一国の主権者で有る。其の働きは何に依て動作を為すかと云うと、其の権力と云うものは各種の政府の機関に由って働かなければなりませぬ。然らば其の組織構造は如何と云うに、其の組織構造に依って権力の働きの度合い、働く方法を規定するのが憲法の妙所で有りましょう。

憲法のもと、治者の支配は決して恣意的になされるのではなく、その権力の発動と運用には憲法の規定による規制が課される。曖昧模糊でない支配とは以上のように説明される。すなわちそれは、憲法によって権力が制約され、その運用が規律されている政治なのである。

以上のように、皇族華族を前にしてのこの講演において伊藤が展開したことは、国家の国際競争力の強化のために国民の文明的成熟が不可欠であり、その結果として立憲政治が不可避だというロジックである。政治的特権層たる彼らにノブレス・オブリージュを説くというにとどまらず、被治者たる臣民の政治的地位の向上があるべき政治の姿として論され、それに対する譲歩が強く要請されているのである。

ここには巷間通用しているような超然主義者伊藤の姿は片鱗も見出せない。むしろ主張されているのは、国民中心の政治である。教育ある国民が政治的意識を高め、国家の統治のあり方に関心を寄せるのは当然と捉えられ、そして理想視されている。そのような国民の政治的活力を吸い上げ、国家の全体的な統治構造のなかに秩序づける枠組みが立憲制度なのである。

このような定式化に対して、上に見られた伊藤の主張は啓蒙専制主義的な「国民のための政治」にとどまっており、彼は国民の一定の政治参加を認めてはいるが、他方で天皇や藩閥政府の政治的支配権を保障するための国民に対する^{しきい}閾として立憲制度を設けたに過ぎないのではないかとの疑問が起こるかもしれない。だが、ここで無視すべきでないのは、伊藤の説く「国民」の内実である。繰り返すが、伊藤は国民の絶えざる開明を国力増強の基礎としていた。そしてそれに合わせて支配の様式も変容していくべきことを認めていた。そのことを勘案すれば、「国民のための政治」がやがては「国民の国民による政治」へと進展していく可能性も当然彼の視野には入っていたであろう。そのことは、これから十年後に彼が立憲政友会を創設し、政党政治の刷新を試みる政治実践のなかに看取できる¹⁴。

5 日本憲法史の光と影

上述のように、明治憲法の制定過程のなかには、一定の民主的要素も含有されていた。日本国民は、(その内容を知らなかったとはいえ)その成立を祝い、支持した。そして、起草者のなかには、国民の政治参加に基づいた国家運営を樹立していくための

14 拙著『伊藤博文』中公新書、2010年参照。

第一歩として、憲法の制定が明確に位置づけられていた。明治憲法を頭から保守反動的な非民主的憲法と裁断することは、当たっていない。重要なのは、その後の政治実践のなかで、この憲法にどのような肉付けが与えられ、それが結果として日本の立憲主義に何をもたらしたか、また何が欠けていたのかを具体的かつ全体的に考察することである。それは、明治憲法史と戦後の憲法史を異質なものとではなく、日本憲法史という一貫性のなかで把握する歴史学的な視野を養うものとなろう。

明治憲法史は日本の立憲主義に何をもたらし、何が欠けていたのか。本稿の最後にこの点について若干の私見を述べておきたい。その際に導きの糸としたいのが、ワルター・バジヨットの名著『イギリス憲政論 (*The English Constitution*)』(1867)である。バジヨットはこのなかで、憲法の二つの機能を腑分けしている。ひとつは憲法における「機能する部分 (efficient parts)」、もうひとつは「威厳をもった部分 (dignified parts)」である。これに対応して、次の二種の憲法概念が提起できるように考えられる。まず前者から「効率的憲法」(efficient constitution)、さらに後者から「演劇的憲法」(theatrical constitution)である。

効率的憲法とは、国家統治を円滑に運営するための制度的仕組みを指して使われている。バジヨットのこの書は、イギリスの国制における効率的憲法の全体像を描出したものにほかならない。

それでは、演劇的憲法とは何か。この概念を提示しながら、バジヨットはその内実について黙して語っていない。筆者は、これを次のように推し量る。およそ国家が政治的共同体として成り立つためには、その成員たる国民の間に大なり小なりの一体性が意識されていなくてはなるまい。その一体性たる国民意識は言語や歴史の共有によってもたらされるのであろうが、そのようにして——教育によって——日常的に国民意識を涵養する一方で、祝典のような儀礼や選挙などの運動を通じて、国家的一体性を可視化し顕現する営みも必要とされる。動員による一体化であり、それが高じるとファシズムのような全体主義が導かれ、立憲主義は瓦解する。しかし、そのような一体性の演出は、国民参加によって立憲主義を成り立たせ、活性化するための前提ともいえる。演劇的憲法とはこの点を指しているといえるのではないか。つまり、国家による統治の民主的正統性を目に見えるかたちで示し、支配の権威化と合理化をもたらすための作用としての憲法である。ここで憲法とは、国家権力の効率的運用のためのシステムとしてではなく、国家権力そのものの正統化作用、国民的統合の機能として理解される。国家権力を権威化^{オーソライズ}する働きと言い換えてもよい。

筆者は、このような効率的憲法と演劇的憲法の識別は、日本憲法史を考えるにあたって非常に示唆に富むと考えている。明治憲法とは、発布時の国民的祝典や——本稿では論及できなかったが——立憲君主としての天皇の創出¹⁵という点において、演劇性による国民統合に長けた憲法であった。それによって、国家権力は国民的基盤を

15 拙著『明治国家をつくった人々』講談社現代新書、2013年、219頁以下参照。

得ることに成功し、権威として自立することができた。しかしその一方で、統治過程の効率化という点にはやがて綻びが生じ、内閣による権力の発動や統制の一元化に失敗し、軍部の独立のような権力の割拠化を招いた。

日本国憲法とそのもとでの政治的实践は、その反動として、国家権力の効率化・合理化＝法治化に精力を傾けてきたといえる。その反面、憲法の演劇的側面はないがしろにされてきたといえまいか。それは確かに、国民性を作為的に演出し、創られた伝統を醸成するものとの指摘が可能であるが、政治的公共性の前提となる国民的一体化を継起的に発現することは、国家権力を単なる暴力から正統化された権威に転換するために必要な“儀式”だと考えられる。国民主権が謳われている憲法であれば、なおさら国民が憲法を作り、国家を権威化したという“政治神話”を思い返し反芻する機会が必要だろう。必要なのは、国民的一体化の顕現を放埒なものとするのではなく、演劇というかたちで秩序化する働きなのである。それもまた、国民の政治的成熟と無縁ではない。